



筑紫女学園大学リポジト

現代華文文学にみるマレーシア社会問題の諸相

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石, 其琳, SEKI, Kilin メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/570

現代華文文学にみるマレーシア社会問題の諸相

石 其 琳

Aspects of Malaysian Social Issues through Contemporary Chinese Literature in Malasia

Kirin SEKI

前 言

本論はすでに発表した「マレーシア現代華文文学への視角」の継続研究である。その内容はマレーシアの現代華文微型小説集《回家》(注1)を対象に、マレーシアにおける華文文学創作の歴史背景を明らかにし、そして創作の基盤である華文教育の歴史背景と問題に関して、具体的に作品をとりあげ研究したものである。今回は同作品集について、更に多くの作品について、華文文学という創作視角から、現地社会における華人意識の表現を考え、また作者らのマレーシア社会の深層描写から見える問題を考察する。ここでまずこの作品集のタイトルに使った作品をとりあげ、作品集の編集宗旨からマレーシア華文文学における表現の特徴などの問題点を考える。

I 作品集のタイトルについて

この作品集のタイトルは「回家」(家へ帰る)となっており、実際作品集の中に同名の作品が二作収録されている。編集者がこの二作品を作品集のタイトルにしたのは、それなりの強い思いが込められていると考えてよい。まず作品集の表紙に掲げられた幾つかの内容に注目したい。

表紙にはそれぞれ現代詩と古詩を提示している。裏表紙には作品集に収録された3作品「帰郷の魂」(注2)、「微笑菩薩」、「忘不了(忘れられない)」の内容摘要を載せている。ここでまず表紙の詩を見ていく。表紙には英語で「Return Home」と書き、次の詩(その①)を加えてある。

その①：「あるバナナの木が風で揺れる、ヤシの木に雨が降る美しい島に、
そこで華文創作を堅持する華人たちがいる。

彼らは 文字で思郷の情と異郷での奮闘と苦勞を描き、人々を感動させる。」

この詩には、マレーシアの土地に、古より移民した華人とその子孫たちが自分の文化伝統を守り、生きた痕跡を誇らしく文学で語り伝えると描写している。この詩を通じて、編集者は作品集の位置づけと編集目的を説明し、その重要性を強調しているのである。同表紙には、唐時代の詩人賀知章(659-744)の詩(その②)「回郷偶書」(注3)を載せている。

その②：「幼い頃家を離れ、年老いて故郷へ帰る。

故郷の訛りは変わらないが、両鬢の髪は薄くなった。

小さい子供たちと逢うが、誰も自分のことは知らない、
お客さんはどこから来たのかと微笑んで尋ねる。」

賀知章の原詩は2首で、この詩は、彼が744年（唐天宝3年）86歳退職後帰郷した際の作品である。もう一首には、「家を長く離れて、帰郷して初めて故郷の変化を知る。ただ家前の綺麗な鏡湖（同注3）の碧い水が、昔のように春風に吹かれて波を立てている。」と綴っている。作品集の表紙に、詩人が淡々と描写する帰郷の懐かしさは、華族らが常に心の底に抱く故郷に対する思念に通じることを示唆している。この懐郷の意は、これからも消えることなく持ち続け、作者たちの創作意識に共感され反映されるものであろう。そこで編集者は、同表紙に「思念は、人間の一番真実で、綿綿たる、感動的、そして最も美しい感情である……」の一文を加えて、この作品集の編集宗旨を明記し締めている。また裏表紙の3作品の内容摘要からは、編集者がこの作品集に託した思い、マレーシアに関わらず、華文文学創作の原動力である華族意識の深層が伺え知れる。この点について、具体的作品を後述して考察する。以下は、まず作品集のタイトルになった2作品を見ていく。

作品①「回家（1）」 文征 作 （1954～）

帰郷の汽車の中、私たちは家族間の話題で議論や雑談で騒いでいるが、内心の喜びと興奮は隠せなかった。父親は、時々争論に交じって仲裁したりしたが、母親は終始沈黙をしている。

昨夜父が会社から一週間休みを取って故郷へ帰ると言った後、母親はすぐに不機嫌になり、無言だった。「休暇取る必要はないじゃない？海外旅行じゃないのだから」と父に文句を言った。

「もう2年間も帰っていない」と父、「親に顔見せるのも当然だろう、実際遠くないのだし」……以前からは、父親の故郷は遠くて、いつもずっと汽車中で寝ていたが、今回は期待のあまり、寝られなくて、父親は機嫌がよく、常に私たちに途中の景色を紹介している。関丹を過ぎて、父はあと4時間で着くと言った。……（中略）汽車は漁村内の板屋の前に止まって、黒い犬が私たちにしゃべりながら吠えている。お爺さんとお婆さんは慌てて驚きの表情で家から出てきて「なぜ手紙で知らせてくれなかったのかい」と喜んで言った。

「ちょっと休みがあって、急に決めたのだ」と父。

「それなら、多く泊まってゆっくりしなさい！」とお婆さんは急いで言った。

「お母さん、私たち忙しいから、明日にはもう帰らないといけない」と母がすぐに言った。

父は驚いた顔を見せたが黙っていた。私たちはがっかりした。父は数日も泊まってと言ったのに、なぜ急に気が変わったのか？

「久しぶりに帰って、またすぐに戻らないといけないから、疲れないように気を付けてね」とお婆さんは父に言い聞かせた。私たちは一日しかここにいられないと聞いて、すぐに父にあちこちへ連れていくよう急かせた。

「さあ、おじいさんの果園へ行こう」と、父はそう言ってすぐに家の裏へ向かった。（中略）

果園には今の季節でおいそうなランブータンの実が沢山なっている。私たちは取ろうと竹竿を探したが、見つからなくて、弟も妹も食べたいと騒いでいる。それを見て父は「木に登って取ってやる」と言い、木に登った。……（中略）もうすぐ採れるところで、急に父が「ワー大変だ！たくさんの黒蟻がいる」と叫びながら、木から滑り降りて、足を地面に強く踏みつけて、服についている黒蟻を落としながら「しょうがない、屋台で買えばいい」と言った。しかし妹はランブータン

が食べられなかったことで、不機嫌のあまりに晩御飯も食べない。……(中略)夜疲れた全員が寝たところ、父が母に「久しぶりに帰ってきたのに、なぜ明日帰らないといけないって言ったんだ?」「こんなところは長く居られるわけがないでしょう、水洗トイレもないし」と嫌がる母、「今夜おそらく眠れないでしょう」。母は都会育ちで、こんな田舎生活は慣れないのはわかる。父は反論できずに黙ってしまった。その時、外の果園に明かりが動いているのが見えた。吃驚して急いで父に告げた。父はしばらく見て、母に言った「ちょっと外へ出る」。私も父の後について果園へ向かった。父は灯りに近づくと、「父さん、母さん」と呼んだ。お婆さんは、懐中電灯で樹を照らして、お爺さんは、竹竿でランブータンの実を採っている、足元には沢山のランブータンの実が集められていた。

お婆さんは父に「明日の朝にはもう帰らないといけないから、父さんは少しとって持ち帰ればいいというのよ、自分の家でできるのはなかなか食べられないからね」と言った。父は黙っていてその表情はわからなかったが、お爺さんは、手を止めずにランブータンの実を採り続けた。

作品②「回家(2)」 顔琦静 作 (1997~)

幼時、学校行く途中、いつもお婆さんが自転車で娘を載せ学校へ通っているのを見た記憶がある。お婆さんはいつも歌を歌って娘に聞かせながら、一軒の雑貨屋さんの前に停車して、娘が好きなお菓子を買い与えた。毎日お婆さんは同じように娘を送り迎えしていた。10年後もお婆さんは同じ店へ行って、時には店の前で止まってじっと待っているが、来るべき人は現れたかどうか不明だった。歳月は流れ、目前のお婆さんは、もう10年前の姿ではなく、老けてしまった。…(略)現在お婆さんの娘はもう卒業して、都会で安定した仕事をみつけて新車を買ったのに、なぜお婆さんの顔には哀愁が満ち溢れているだろう。のちにやっとその理由がわかり、その道理を悟ったのだ。

あの日、母と喧嘩をして車で家を飛び出し、小雨が降る中、怒りを発散するため、無意識で車を走らせた。例の雑貨店の前、あのお婆さんの雨に濡れた姿を見かけた。すぐに傘を出して、お婆さんのそばに行った。

「お婆さん、ここで何をしているの?雨が降っているから、家までの乗せていきますよ!」

「いいえ、いいえ、娘が帰ってくるのを待っているの」と、お婆さんは手を振りながら断った。

「あなたの娘はもう新車を買ったじゃない?雨がますます激しくなったし、やはり私と戻って家で待ったほうがいいでしょう!」

「いいえ、私は娘を待つんだ、彼女は家路を忘れたかもしれないから」と再度私の好意を拒否した。「彼女は家路を忘れたかもしれないから……彼女は家路を忘れたかもしれないから」との言葉は私の脳裏に絶えず響き、辛酸さが心に沁みた。何度も勧告する結果、やっと私の車で帰ることに同意したのだ。車に乗っているとき、ずっと後ろを振りかえって、家路を忘れた娘が突然に出現するのではないかと心配のようだった。

お婆さんの家についてから、家に立ち寄るように言われた。家に入ると壁には多数の家族写真が見えた。すべて彼女と娘の幸せな笑顔の写真だった。…(略)…「娘さんはよく帰ってきますか?」とお婆さんに尋ねた。コップに水を入れて持ってきてくれたお婆さんは「いいえ、もう数年帰ってこなくて、たまに電話してくるぐらいなの」と言った。……(略)家路の途中、私はお婆さんのここ数年の堅持を考え、母と過ごした時間、成長の道のり、挫折した時もいつもそばで支え

てくれたことを思い、涙が溢れてきた。

やっと、一つの道理を悟った。家の門は、いつも私をもどれるために開かれている。急いで車を加速し家路へ、母に謝り抱擁したいと感じた。家の前につくと、暗闇に母の焦って待っている姿が目に入った。家に帰るって、本当にいい気持だな！

「帰郷」「家路」の意念は、人間だれしも共感できる感情であり、文学表現の重要テーマの一つである。実際この作品集において、表紙に提示された詩のような内容と情緒を描写するものも多くみられる。作品①と②は、この作品集のタイトルと同名であるが、編集者はマレーシアの華族たちが抱える帰郷の意念を重視しながらも、偶然にこの同名の2作品を収録したのではないと考え、二つの問題点をとりあげている。以下は2作品の作者の世代の格差、またそれぞれストーリーの正反対な結末の描写に、現実社会に対する深刻な思いが込められている点について述べていく。

両作品はともに親の深い愛情が子に気づかれる表現であり、親の子に対する愛情の深さが淡々と描写されている。作品①に関しては現代化を背景に、都市と田舎の生活条件の格差に起因する親子関係の不調に問題提起をしている。子供たちがランブータンの実を食べたいのは、マレーシアならではの風情表現である。それに応えようとした祖父母世代の深い愛情、同時に生活の不便さを理由に、休暇取ったにもかかわらず泊まることを拒否する息子の嫁と鮮明に対立した結果、妥協できずにトンボ返りの帰郷になってしまう。現代マレーシア社会の実態をあらわす一方、生活価値観の変化の影響もたらした親子の絆の弱体化が露呈されている。

作品②では、若い作者が描写した親子愛の物語の結末に、「母に謝り抱擁したいと感じた。家の前につくと、暗闇に母の焦って待っている姿が目に入った」と描写し、更に「家に帰るって、本当にいい気持だな！」との表現は、若い娘の心の変化が作品①と相対的であり、薄化された親子の絆を再確認し、その重要さを認識できると暗示するのである。

タイトル「家に帰る」の2作品は、表紙の詩の意境と少々異なる表現に、現代マレーシア華族社会における親子関係の淡薄化が一般化された感慨を描写し、新たに親子の絆の重要性を再認識させる意図であろう。作者たちは、精神的に「異国」という生活環境において、多様な問題を洞察しながら自らも経験し、その尽きない葛藤に悩まされているであろう。これらの思いは、創作の基本的な原動力である。

長い年月において、マレーシアで生活する華族たちには、国籍こそ現地化されたのだが、現実に生活習慣と価値観において、現地化しにくい部分が潜在していることは否めない。家族、親子が普段の生活に、多民族、異文化と宗教信仰について、教育環境のレベルが高まり、かつ広がるにつれ、価値観の変化も見られるのだが、彼らの心には依然として複雑で、困惑する問題を抱えている。移民世代と現地生まれ育つ世代間、親子が異文化の環境への受容、価値観、生活の現代化がもたらす人生観に対する格差、適応によって生じる矛盾、衝突などは、このマレーシアという人生の舞台を背景に、様々なドラマが展開されている。以下は問題点を分類しながら、具体的に作品を考察する。

II 婚姻と宗教信仰の問題

宗教信仰については、マレーシアの多民族社会ならではの頻繁にみられる現実問題の一つである。

人口の比率と移民の多さ、教育レベルは上昇したとは言え、これは頭で理解できる空想的理念である。メンタル的に、信仰の違いによって、完全に自分たちの日常生活習慣、さらに人生の価値観を変えることは、容易ではないことが理解できる。特に東南アジア社会において、このような現象が顕著に露呈している。一般に自分たちの文化習慣を移民すると同時に現地へ持ち込み、さらに現地要素を取り入れ、工夫しながらも定着させるのが普通である。しかし宗教のような信念の強さが要求されるものは、信者になるまでの決心がなければ、妥協しがたいであろう。外見では容認され受け入れたとしても、内側では自分たちの文化理念と相容れない対立的な立場にあることも避けられない。この点に関連して、以下の三作品をとりあげる。作品の内容は、典型的な理念衝突を描写している。表面的には、儀式へのこだわりのように見えるが、根本的に華人の子孫であることで、彼らの心に根差している文化に対する絶対性と強い信念が露呈されているのである。

作品③ 「逆女奔喪」(親の葬式へ出る娘) 洪祖秋 作

燃えるような日差しの中、バスが止まった。彼女は背を伸ばして車窓から遠くを眺めた。緑の叢林の隙間から、熟知しながらも不案内でよそよそしく感じるあの古い家が地平線から現れた。家の前にはテントが張っており、周りのテーブルに冥銭と蠟燭が置いてある。家中人の影が行き来して、忙しく混雑に声をあげている。蒸し暑いなか一瞬怪しげな空気がバスの中へ流れ込んで、むやみに彼女をきつくとりこみ、極度に不安を感じさせた。

彼女は頭巾を整え、大きな息をして井戸に落ちた子ウサギのように、この悪境から早く逃げ出したい緊張と焦りがやまなかった。真っ暗な海に落ちたように無力で、無情に暗闇に飲み込まれるのを待ただけだった。そこは自分と深い絆がある実家だった。楽しい幼い時代を過ごし成長した。また心が折れた時、必死に帰ろうとした安らかな場所だった。本来なら、彼女の成長を育み、心の傷を治してくれる故郷に帰ってくるのは、迷子が母親の懐に返ったような温情に溢れ、かつ興奮と嬉しさでいっぱいと感じるのだが、これから目前に待っているのは暴風雨と彼女を溺死させる長い黒い荒れ果てた川であり、そして彼女自身もその深淵へ飛び込むのを覚悟しているのだった。

「帰らなくてもいいじゃないか」と夫が低い声で囁いた。しかし彼女は古い伝統文化育ちの娘だし、生まれて間もなく母親に抱きかかえられて、先祖に線香をささげ拜礼したのだった。香煙漂う中の家族として成長したのだ。心身ともに幼い時からの伝えられ、身に着いた彼女には、慈母の遺容を見なくて、葬式に臨まないことは到底できない。時間を遡ることはできない、これまで彼女はどれだけ母親のそばに戻りたい、もう一度母親に甘えて、そのぬくもりを受けたいと考えたのか？母親が往生したのを聞いて彷徨し茫然となったのだった。彼女はこの葬式は伝統的に行うに違いないことを知っている。だが弟に自分がすでに改宗され、線香をささげることもできなくなって、偶像への膜拜もできないと言えるだろうか？実はこれらの礼拝式は、すべて彼女の幼い時分の、家で毎日朝晩欠かさずつとめた作業だったし、家中先祖の霊牌の線香つけ役は彼女だったのだ。

運転手はクラクションを鳴らし、数人を呼び込んだ。弟は真っ白な喪服と黒いズボン、憔悴顔だが、興奮と期待で彼女を迎えた、「帰ってきたからちょうどよかった、姉さんを待って母さんを納棺するのだ」と言い、車のドアを開けてくれた。だが姉の服装を見るや否や、こわばった表情に変わってしまい、まるで空気が凍り付いてしまったようだった。

彼女は車を降り家へ。法師のようなひとが彼女を一瞥して、「外から帰ってきた孝女、どうぞ入

り口から頭を下げて、あなたの親孝行の心を見せるよう、這えてお入りなさい」と大声で言った。彼女の心が重く、頭が恍惚で混乱している中、法師さんの指示に従えず、立ったままで家に入った。彼女は自分が不孝な娘ではない、たとえ今這えて家に入っても母の命は呼び戻せない。・・・母の遺容をみて・・・かすかな微笑がみえるが、娘が返ってきたからなのだろうか、ふっと涙がほおを濡らした、母の前で大声で泣きたい、母に抱きしめられて、昔のようにつらい思いを思う存分吐き出したい。しかし新たな信仰のしきたりではできなくなり、跪拝することも出来ず、冥錢と香を立てることも許されないのだ。涙の視線からおばさんたちの嫌味な笑いとおじさんたちの憤慨顔、近隣の野次馬のまなざし・・・法事が始まり、彼女は静かに隅に退き、満面怒りの弟は家族を率いて跪拝し続けている。法師は敵意に満ちたまなざしで彼女を睨んだ。煩雑な儀礼が続いている・・・彼女は死後にも、いろいろなしきたりに堪えないといけないのかと考えた。「孝女が慈母に着衣する」と法師は、故意に全会場に聞こえるほど大きな声で呼びかけた。弟はやってきて彼女の服裾を引っ張って、亡母の衣服のボタンを留めるよう暗示した。小さい頃、いつも母にボタンを留めてもらったが、今初めて、自分が母の衣服のボタンを留めるのだ。だがこれは宗教に反してないのか？と彼女は躊躇した。「早くボタンを留めなさい」と催促された。弟は一本の線香を持ってきて、彼女に渡そうとしたが、彼女は一瞬戸惑い、受け取らなかった。涙がこぼれて、周囲に親族と近隣からがやがやと議論が飛んでくる、彷徨無助と感じ、突然轉身して外へと飛び出した。入口に溢れた人たちは、一本の道を開き、彼女はそこから逃げるように走り去った。生涯不孝の罪を背負うことになる。そして唯一の親情も断ち切ってしまったことを彼女は知っている。

異文化間の摩擦に対し、あるいは相互的な理解があり、工夫をすれば、受容し得ることも考えられる。しかし、宗教信仰の場合、異宗教間の相違性が絶対的であり、信者の日常生活習慣に至るまで浸透しているため影響が深く、特に様々な人生の営みに関係する儀式に関して、信者ならば、当然敬虔に守り、実行することが要求されるのである。作品③には、逆女の苦悩を淡々と描写し、自分の力ではどうしても妥協できない問題の深刻さを示唆している。ある意味では、宗教の相違がマレーシア華族社会において、相容れない最も大きな壁のひとつであるとも言えよう。主人公の彼女が華人の孝女として、しきたりに従うことは、改宗したイスラム宗教の理念に反するだけではなく、さらに自分の人生を否定することにもなるのである。だから帰郷する前、夫から「帰らなくてもいいじゃないか」とつらい思いに直面する彼女に同情し、愛情を込めた苦言をする描写がある。彼女は夫の愛情を受け、結婚という人生の重要な選択をしたことに対し、悩みつづけ、努力したにもかかわらず、結局自らの力では妥協できない苦しい葛藤から、それまでの人生を切り捨てる悲しい決断を下したのである。この作品が描写した現実とは、ただの空想世界ではない現実が確信できよう。

多民族国家であるマレーシアでは、作品③のように、多民族間の結婚恋愛で起因する家庭及び親族間の問題は、決して少なくはないし、実際この作品集にも多くとりあげられている。以下は、異民族間の婚姻問題に関わる親子それぞれの立場での困惑を描写した二作品をみる。

作品④ 「骨灰」(遺骨) 勿勿 作 (1946~)

高速道路は停車できないので、彼は緊急ランプをつけエンジン故障を偽って、車を道沿いに停車させた。そこからあの奇抜な大木が見えるのだ。ザボンの木のように高く、真すぐに伸び、二人が

抱き合わせるほどの幹まわり、ぎっしりと藤が寄生していて、古木の表面からは生命の気配が感じられる。枝は多いが、葉っぱは少ない。ここ数日間では風が強く、樹頂は更に禿げてみえる。上を眺めると空が青く、ここだなぁと、母は遺骨をここに埋めたいと言ったのであった。理由は、彼も知らないのだ。

精巧な木の小箱を開けば、母の遺骨が丁寧におさめられている。焚化炉の洗礼を受け、数十年の生涯を経た人体がこんなにも瞬間的に灰になるのだ。・・・彼は指を黄灰色な灰に刺した。わずかに余熱が感じられ、母のこの世に残る唯一の痕跡を、この樹叢に撒くのは忍びないと思った。

結婚後、自分の家庭ができ、彼は故郷から離れると同時に、母に会うことも少なくなった。この点について、常に許しがたい気持ちを抱き、今になってはもう取りかえしのつかない事実になった。母はこの結婚を望まなかった。口では何にも語らなかったが、その無念さは、母の言行からも感じとれたのだ。異族の通婚は受け入れるが、しかし生活習慣と宗教信仰に直面する困難は多いと母は言った。母の葬式について、一度大変悩んだのだが、幸いにも母が臨終時に、自分の気に入った埋葬の場所を決めてくれたのだった。

数年来、彼は毎日車でここを通り過ぎているが、この木の存在は全く気付かなかった。母はどうしてこの木のことを知ったのか？もしかして偶然にここを通って、この木の怪奇な外観が彼女に深い印象を与えたのであろうか？彼はゆっくり手を開いて、風が灰を手掌から飛ばし、無数の小さな白蝶が飛び立つように、空へ消えていった。

今後、毎日の通勤途中、ここを通り過ぎる際、彼はこの叢林を必ず眺めようと考えた。もし母が黄泉で感じられれば、息子は恙なく暮らしていることがわかるだろう。

これが母の本意だったかもしれない。

作品⑤ 「微笑む菩薩」 小黒 作 (1951～)

秀蘭は一夜中眠れなかった。鶏が鳴くとともに彼女はすぐに起き、菩薩の前に108回も礼拝した。礼拝の際、秀蘭はいつも菩薩の表情を観察し、菩薩の意思を解読している。白磁の菩薩は長年の膜拝で、線香の煙で黄ばんでいる。・・・(略)

息子の修文の幼小時には、体が弱くていつもそれが悩みの種だったが、菩薩を奉ってから病気もよくなって、たくましく成長してくれた。毎日菩薩に平安、学業優秀などを願って、菩薩も彼女に失望をさせなかった。秀蘭が最も喜んだのは、修文は成績優秀で奨学金をもらってイギリスへ留学できることだった。その留学審査の面接の朝、秀蘭は数え切れないほど菩薩に膜拝して順調に行けるよう、またいい医者になれるよう菩薩に頼んだ。

当日菩薩の顔がかすかに微笑んでいるように見えた、いい兆候なのか？面接会場に行く途中、事故のため大渋滞で遅刻をしてしまった。そして息子が面接を受けている間も菩薩に願い続けた。

7年後に修文は大学卒業後、病院に勤めて一年がすぎた。この7年間彼女は積極的に仏教会の慈善功德を積み上げ、遠いインドの貧困地域まで布施を行ったし、息子が立派になるようお願い続けた。日々の生活が楽しくて早く感じられた。修文から彼女を連れて帰る連絡が来て秀蘭は一晩眠れなかった。未来のお嫁さんはどんな人だろう？病院の同僚と修文が言ったのだが、同じ医者なのか？

修文の車が家の前に止まった。家で手伝いに来た友人たちはすぐに庭へ走った、ずんぐりしている修文が車を降りてすぐに「お母さんは？」と尋ねた。秀蘭は家から出て、すぐにミナが車から身

を乗り出しているのが見えた。明るくて、輪郭が鮮明で、きれいな方だと秀蘭は思った。友人たちみな吃驚して、息をひそめた。ただ修文が緊張した声で「お母さん」と呼んだ。

秀蘭は朦朧としたなかで「お母さん」と、肌黒いミナの声が聞こえたようだ。息子は「お母さん、ミナは菩薩の故郷から来た人だよ」と耳元に小声で呟いた。秀蘭は茫然として、菩薩ってこのような意味だろうかと思った。

以上③、④、⑤の作品は、ともに婚姻で繋がった新しい家族との間に生じた宗教と民族の壁の問題をとりあげている。「逆女奔喪」作品はタイトルをみれば、文字通り「逆らう娘」と責めつける表現であり、華人社会の一般的感覚を強烈に示唆している。作者は娘への同情、彼女の無念さを随所で繊細に描いている。宗教信仰を容認できない悲しい娘のころは、母親の葬式を望む最後の悲願も叶えられないまま、改宗した自分の精神的苦痛と戦い、華人意識の重荷に潰され、結局その伝統文化に束縛された領域から逃げ出し、切なく家族とのつながりを断ち切るのである。

「骨灰」（遺骨）の作品は母親が息子の結婚に関わる異教を黙認をしたものの、死後の骨灰を息子が常に見守れる場所に埋葬する覚悟は、その生涯において、息子の結婚に対して、最後に作者は「これが母の本意だったかもしれない」と描写したように、母親の息子に対する深い愛情の反面、心の底に満ち溢れた無念さと寂寞を感じさせるのである。

「微笑む菩薩」は、編集者が作品集の裏表紙にこの作品の内容を摘録しているように、この作品に込められた華族意識の深層を重要視していることを読者に示し、吟味の希求であろう。「お母さん、ミナは菩薩の故郷から来た人だよ」という、息子のセリフに作者は異民族に対する理解と受容をそれらの共通性を強調し、認め合う有力な道筋を母親に提示したのである。母親が敬虔に信仰している宗教への共感に助けられ、抵抗することなく、ここから異民族の嫁を受け入れてくれると息子は考えたのである。ミナが現れた時、周りの友人たちの驚き、そして息子が母親にミナのことを伝える際の緊張した様子を描ききった作者は、民族間の受容の難しさを露呈させ、華族におけるマレーシア多民族社会の現実問題を提起するのである。

ここで取り上げた③、④と⑤の作品の芸術表現について、「逆女奔喪」の激烈な感情描写と後者の2作品には、親の無言で静寂的表現が対照的であるのだが、その主人公たちの心の深層に抱える苦悩には差はないであろう。

多民族間の婚姻関係による苦悩のほかに、日常の生活にも様々な形の摩擦は避けられない。シンガポール同様、国民の構成が多民族であるがために、相互的融合、妥協の必要性が多いのである。しかし庶民生活というのは、煩わしい日常の積み重ねであり営みである。現実的に政治的理由などを背景に、相互利益間の損得に起因する衝突は当然存在するが、また異民族、文化間の誤解で生じる愛憎感情も避けられないであろう。この点について、以下具体的に作品をとりあげ考察する。

Ⅲ 民族と文化の問題に関する描写

ここでマレーシア社会において、一般の庶民生活をテーマに、様々な日常生活から生じる民族文化間の摩擦を描写する二作品をとりあげる。

作品⑥「一枚の合板」 章欽 作（1945～）

今日は6月1日、兆祥の家の隣にマレー人の一家が引っ越してきた。彼は隣人に会う度に、礼儀正しく挨拶し、マレー人も同じように笑顔で挨拶を返した。お隣さんには妻一人と二人の子供がいる。兆祥の家は純白な狐犬（日本犬）を飼っている。このわんぱく犬は、子供を見ると、すぐに飛びついて吠えたりする。ある日、隣の子供バディナがフェンスに近づき、両手で網を掴み、庭にいる兆祥の子供がボール遊ぶのを見ていたところ、白い犬がフェンスに飛びつき、バディナを吃驚させてしまい、子供が大声で泣き出してしまったのだ。彼女の母親はすぐにとんで来て子供を抱き上げ、口では絶えずに罵倒している。翌日兆祥は家を出ると、フェンスに800×1000（CM）大きさの合板が掛けられたのを目にしたのだった。

「マミ、どうして隣の人は私たちのボール遊びを子供たちに見せないの？」と、兆祥の9歳の娘が母親に聞いた。「彼らは私たちが豚肉を食べるのを好きじゃないから」。「どうして？」「彼らはマレー教だから、ブタを食べないの」。子供は、豚肉食べないから、友だちになることもできないのかと不思議に思った……。中略ある日、兆祥の子供はボールを隣の庭に投げってしまった。すると、隣のマレー人の子供はそのボールを玄関へと届けてくれた。兆祥11歳の子供は笑顔で「テリマカシ」（マレー語「ありがとう」）と、マレーの子供も礼儀正しく「サマサマ」（マレー語「どういたしまして」）と言ったのだった。その後、子供同士が親密なり、兆祥のこどもは折り紙の船を作って、隣の玄関の鉄の大門からマレー人の子供へ。しかし兆祥夫人は、「あんたたちは彼らと遊ばないで、マレー人は信頼できないから」と子供を叱った。「ママ、彼らは悪い人じゃないのに？」と子供。「子供は分からないから、とにかく遊ばないこと」と奥さんは玄関の鉄門を「ボン」と大きな音を立てて力強く閉めた。しかし子供たちはおとなの警告をよそに、交流は続けたのだ。「ほら、彼らは合板を掛けて、私たちが嫌っているから……」と母親はあきらめずに子供に言った。子供も納得せずに、「ただ折り紙をあげただけなのに……」と反発した。

時間が経つと、大人は依然として子供の行動を叱り続けるが、こどもたちは日々仲よくなり、白い犬もマレー人の子供に馴染んで、しっぽを振って好意を示しながら遊ぶようになった。フェンスに掛けた板は雨風で破れ、穴が開き、子供たちはその穴から、バディナはいつも子猫を穴から兆祥の子供に抱かせ、子猫も白い犬とも仲良く遊ぶようになった。

中秋の名月の夜、兆祥の子供は家の前にランタンを携えて、隣のバディナもピンクのランタンを持って、微笑んで家の前に立っている。あの大きな合板は、いつの間にか取り外されていたのだ。

この作品はマレーシア多民族社会において、一般庶民のとてつもない日常から生じる文化衝突を描写している。作者はマレー人の家族について「妻一人と子供二人」と書いているが、これもマレーシアならではの表現である。マレーシアでは一夫多妻の制度があるため、この点を強調したのは、作品で触れた人物が特別な階層ではなく、ごく一般庶民のマレー人家庭であることを暗示し、その場面も普通にみられる現実だと示唆しているのである。

異文化における日常生活というのは、多くの困惑とトラブルが随所に発生する積み重ねである。多民族が共住し、空間をともしにする生活では、作品⑥のように、些細な出来事で、大きな民族と宗教文化への嫌悪感まで展開してしまうのは、多民族社会の特徴であり、頻繁に起りえる現象である。その結果、民族間に障害の壁を作ってしまう可能性も多々あると予測できる。作者は、大人たちの

過剰な反応に対し、無邪気で先入観の妨害をうけていない子供たちが、自然的かつ自発的な交流を通じて、皮肉にも大人社会の憎しみを和らげ、わだかまりを解消する原動力になったことを描いている。

この作品の表現について、特に2か所の描写に注目したい。一つは、兆祥の子供はボールを隣の庭に投げてしまい、隣のマレー人の子供はそのボールを玄関へと届けてくれた時、兆祥11歳の子供は笑顔で「テリマカシ」と、マレーの子供も礼儀正しく「サマサマ」と言った。華族の子供がマレー語で謝意を表示することで、自ら相手を受容し、相手に対し尊重する気持ちを表している。そして二つ目は、華族文化の伝統行事である中秋の名月の日に、今度は隣のマレー人の子供も華人たちの習慣に従い、ランタンを持って祭の結末の描写がある。この二つの表現は、前後に呼応した構想であると考えられる。作者はさり気なく、子供たちのそれぞれの言動を通して、異民族間の交流は、些細な日常生活から始まり、相互理解と受容の重要性を指摘したのである。

作品⑦ 「二つのヘッドランプ」 章欽 作 (1945～)

林成は門外の籐の椅子に座って、夕日を眺めながら：明日ランプをつけて、ゴム林へ「割胶」（ゴム液取るため木を切る作業）に行っても大丈夫かな？と悩んで落ち着かないのだ。

時計のアラーム音で目が覚めた林成には、またあの事件のことが脳裏に浮かび、阿貴の忠告の言葉が耳に響く「阿成、クアラルンプールにはもう事件が起こっているから、明日はランプ付けていけない方がいい」と。彼は起きて門を開けたのだが、外の雰囲気は異様に感じられ、周りの誰も起きてはいないのだ。村全体が静かで暗く、遠くからの虫の音、時々犬の吠える声が聞こえる。彼は部屋に戻り、水頭灯、割刀（ゴム切りナイフ）を見ていられ、ため息をついた。どうしようかな、行こうかそれともいい方がいいのかと迷った。再度外へ出てみたら、遠くゴム林にかすかな光が見えた。彼は「ああ、誰かが出ているじゃないか」と嬉しく思い、すぐに割胶の道具をもって、頭にランプをつけ、自転車に乗って出かけた。

ゴム林についたのだが、誰もいなく、ただ速くに一つの明かりが寒風に揺られている。彼は仕事をはじめめるのだが、寒風が強くなり、灯が点滅して心も不安を感じた。突然遠くの明かりが消えて、ざわざわした音が近づいてきた。彼は怖くなり、地面から枯れ枝を拾い、もしこちらに来たら、戦うしかない心に決めた。その騒音はますます近づき、林成は反撃しようと身構えた。

「もしもし、私は魯丁です、怖がらないで、ランプの火を借りに来たのだ」。暗闇の中から話す声が聞こえた。その声はマレー人だったし、林成の恐怖は増した。もしかして、火を借りるのを装い、攻撃するかもしれないと警戒し、枯枝を更に強く握りしめた。ランプの光が相手の顔を照らした時、水頭灯と割刀を持っているのを見て、彼はやっと心を緩め安心することができた。

「あなたが怖がっているのはよく知っている、私も同じです」、マレー人は近づき笑顔で言った。林成も微笑んだ。

「私のランプの火が風で消されて、マッチを忘れたので、危険を承知で火を借りに来たのだ」。マレー人は枯葉を持って林成のヘッドランプから点火して、二つのヘッドランプが暗闇の中で、二つの心を明るく照らしていた。

「私も怖かったが、しかし火を借りないと、家が貧困でどうすることもできないし」と、マレー人の声は穏やかで温厚だった。

「そうだよ、私も同じだよ。」と林成は強く応えた。

「私たちは同じように貧しんだよ」、マレー人は林成の手を握って、二つのランプの光は深い暗闇の林を明るく映し出し、二人の異民族の友の心を照らしたのだった。

以上⑥と⑦は、同作者の作品である。⑥について、犬が飛びつき吠えたごく普通の出来事から始まった他民族へ生じる嫌悪と差別意識は、子供の純粋で天真爛漫な感情によって相互受容されたことと描写する。一方⑦の内容では、庶民生活に関わる大きな利益の争い事件を背景に、民族間の憎悪と恐怖心を掻き立てられたのに対し、心に共感できる人間本来の素朴な感情と思いやりによって解消されたことを描写している。作者の年齢を見れば、マレーシアという国の成長と発展を共に歩んだ世代であり、この国における反華衝突事件が頻繁に起った歴史の現実を熟知の上、痛感する記憶もあるだろう。作者は、この2作品を異なる視点で、民族間の異文化摩擦問題を描写している。マレーシアで生きる華族としてだけに限らず、最も自然な人間の感情の営みこそが、二つのヘッドランプのように、多民族社会の矛盾を解く貴重な知恵であることの問題を提起し、作者はその思いを創作に込めたのであると考えてよい。

さて、東南アジア地域の文学作品を研究する過程では、共通して、華族たちが長い歴史背景をテーマに、日本経験を描写する内容がよく見られるのである。すでに発表した論文(同注2)にもこの点について考察したが、今回の作品集にも「忘れられない」という日本関連の作品が収録されている。以下作品をとりあげながら考える。

IV 日本についての描写

実は本論がこの作品「忘れられない」を提起する一つの重要な理由を述べる。第I章で述べたように、この作品は作品集の後ろ表紙で摘録された3作品の内容のひとつである。要するに、作品集が編集される際、この作品がマレーシア華文文学における位置づけ、さらにその創作意識が重要視されていることが理解できる。

作品⑧ 「忘れられない」 钟依瑄 作

ある淡い月光の夜、暮色が綺麗な涼亭を包みこみ、地には桜の花びらが風に吹かれ、深い庭から綺麗な歌声が空を突き抜け、日本語の歌詞が、余韻深く流れている・・・異国の歌なのに、空想の世界が、こんなにも魅せられ、全てを忘れさせてしまいそうだ。

「何の歌?」、ある硬く渋い声に私は現実へと呼び戻された。「日本の歌」と言い、私はその曲名を読めなかったのだ。ふと目を開いて、目前にはお婆さんの姿が見えて、驚いて震えを感じた。周りの空気が突然静まったようで、何にも聞こえなくなった。お婆さんの神色は淡漠で、波乱が見えなかった、はっきり聞こえてないようだが?しかしよく見れば、彼女の瞳に深い霧が曇ったように見えるのだ。振り向けば、お婆さんの蒼白な姿は、遠くへ去って行った。彼女の心は苦痛に沈んで、全ての傷痕が滄桑の目に現れている・・・

幼い頃の印象が脳に浮かび・・・ある明るい晴天の正午、私は母の懐で静かに聞いている・・・母の話の思い出したのだ。1942年日本軍がマレーシアを全面進攻し、人々が消却できない苦痛な記

憶、そしてあの深い血の傷痕が今でも残留している。お婆さんはその被害者の一人だったのだ。夕食後、庭で月を見つめているお婆さんのところへ「お婆さん、今日私は・・・」「いいよ」、お婆さんは頭を左右に振って、私の話を中断させ「座りなさい」と言った。傍の籐の椅子に座り、夜風に吹かれながら、お婆さんは故事を語り始めたのだ。

あの夜、日本軍がお爺さんを捕え連れ去ろうとした。幼い彼女は「お爺さん」と泣きながら、後ろに追いかけていた。しかし近づけなかった。なぜなら「逃げよ・・・阿珍・・・早く逃げろ・・・遠くへ行け・・・わしの目の前から消えろ！」と叱られたのだ。しかし、自分にとって、温厚で唯一いつも優しく微笑んでくれる最愛のお爺さんだったから、どうしてもあきらめて、お爺さんから離れてしまうことはできなかった。足が傷だらけになったことにも気づかずに、血の跡が見えてからやっと怪我したのを知った。泣き崩れながら繰り返し、お爺ちゃんと叫んだが・・・当時のこの光景は、彼女が一生忘れられないのだ。・・・お爺さんが苦痛を表すほど、日本の兵士たちはますます狂笑していた。「彼らはお爺さんを足で踏み抑えた・・・」お婆さんは淡々と語ったが、心に血が流れているように、凄まじく聞こえた。「水をお爺さんのお腹に注入して・・・お爺さんのお腹が膨らんで、驚くほど大きくなっていた」、一瞬お婆さんは恍惚になったようで話を止めたのだが、すぐさま語り始めた。「私は大声で日本軍にお願いしようと思ったが、喉が詰まって声が出せなかった。いまもお爺さんがわざと私に声を出させないように、必死で止めたのではないかと疑っている。それは日本軍が私を見つけないためにね・・・」お婆さんは私の頭を撫でながら微笑んだ。最後にお爺さんのお腹は強く一撃され、血が口元からをどろどろと流れだした。

日本軍はいつ現場から離れたかはわからなかったが、しかしその残忍な笑い声は永遠にお婆さんの耳元に響き残っていた。死にかけているお爺さん、大量の血に染まった地面、濃烈な血腥の匂いが空間に充満して、ずっとお婆さんの世界に漂っている。お爺さんは目を閉じた。最後に幼い自分の姿をしっかりとお爺さんに見せた。「お爺さんきっと怒ったでしょう、まあ怒ったほうがいい、お爺さんらしいだからね。・・・」話が終わって、お婆さんは軽く私の肩を叩いて「もう遅いから、部屋に戻ろう」と言った。・・・部屋に入る前、私は月を眺めた・・・お婆さんの消せない傷痕は、忘れるべきなのか？私は原因不明で、心臓がドキドキして震えている。脳裡には、今朝聞いた日本の歌のメロディが響く・・・その曲はもっと悲情に満ち溢れている・・・あたかも心臓に穴が開いたように、どうすれば塞げるのだろうか。

いま時、日本の風潮は世界中に展開され、社会に根付きつつある。天真爛漫な子供たちは日本の面白いアニメに夢中になり、口をあけて笑ってみている。学者は真面目に日本語を勉強して、うまく話せるようにと期待している。流行を追いかけている友だちは、綺麗なメロディを共有して、我を忘れたように、意味不明の歌詞をロザンでいる・・・

忘れた、われわれはもう忘れた・・・尋ねたり、聞いたり、記憶することを忘れて・・・私たちは、子孫であること。「恨み」があることはもう知らない。私は心の底から痛く感じた。私は知っている——無限にある恨み、たとえ消せないにしても、結局早かれ遅かれ時間に燃え尽きてしまうことを・・・

一首の歌のように。耳元で悠々と響き、奥深く、遠くへ。

この作品を考える際、まず作者が90年代生まれの世代であるの点に注目したい。お婆さんの日本

歌に対する反応の細かい描写は、未だにその苦痛の記憶を忘れられない事実を露呈している。その悲惨な記憶と対照に、美しい日本のメロディは、いまの若い世代に魅せられ、強く印象に留められるのである。華族ならではの創作テーマとは言え、作者からは、過去の日本軍の侵略と残忍な事実も、しょせん歴史の一ページの記録になるであろうと自らの考えを示唆する。華族「子孫」である作者は、結尾の描写に、身近な社会風潮に疑問を投げ、問題の提起をするが、世代間の日本感情の格差は恨みを強調することなく、いずれまたあの歌のように、心の奥深く、遠くへと消えていくこと悟りながら締めくくったのである。

結 び

今回とりあげた作品と考察したいくつかのテーマより、アジア地域の華文文学に共通する内容と問題が多々あることが明らかになったと考える。華文の文学創作の基盤である華族の存在、さらにその文化への伝承が絶対的条件であることも否めないのである。反面、華族としての子孫は多くの伝統を受け継ぎながら、それぞれが多民族国家で生きる過程で、人生の価値観の変化は不可避なのである。マレーシアに限らずに現地化、同化を深め続け、グローバル的社会が広がる中、新世代の華族が華文文学を通して、今後も社会を透視しながら、自らの手で人生観を語り、新たな視点が展開されることを期待したい。

注

- 注1 《回家》 钦鸿 闻彬 主编 江苏凤凰文艺出版社 2014
- 注2 「帰郷の魂」の作品については、既に発表された論文「現代マレーシア華文文学への視角」（筑紫女学園大学・短期大学部 人間文化研究所年報 第27号 2016）に参照されたい。
- 注3 賀知章の原詩は「少小離家老大回，郷音無改鬢毛衰。兒童相見不相識，笑問客從何處來。」である。この「帰郷」の詩は二首ある。もう一首の原詩は「離別家乡岁月多，近来人事半消磨。惟有门前镜湖水，春风不改旧时波。」である。詩にある「鏡湖」は賀知章の故郷現在浙江省紹興會稽山北にある。

主な参考文献

- 海外華文文学史「第1巻」
世界華文新文学史（上、中、下）馬森 著 INK 印刻文学生活雜誌出版有限公司 2015
南洋華僑与閩粵社会 陈达 著 北京商务印书馆 2011
華文学與中国性 黄錦樹 著 麥田出版 2012
世界華僑華人簡史 庄国土 主编 暨南大学出版社 2014
東南アジアの華人文化と文化摩擦 酒井忠夫 編 巖南堂書店 1983

（せき きりん：アジア文化学科 教授）